年　頭　所　感

―　今年も燻し銀のごとく研究会の歴史を重ね、互いに精励しましょう　―

前　嶋　正　受

謹賀新年　本年 2016 年も、皆様方には健康で幸せな 365 日であることを切望いたします。

さて、昨年は**本研究会の創立 50 周年記念行事**が延べ約 80 名の参加で盛会に終了しました。又同時に発行された記念特別号では本研究会主催行事の 50 年史が詳解されています。

1965 年 7 月 17 日の本会の発会式が近畿大學で厳粛に挙行された後、2015 年の記念式典に至るまでに、**講習会**は 35 回、**講演会**は 112 回、**見学会**は 59 回、**夏季セミナー**は 21 回、そして 1986 年から**学術技術講演発表大会**が 29 回行われてきました。正に学術技術向上に向けて一心に邁進されてきた吉村前会長、野口会長、多くの産官学の役員の方々、そして事務局の藤野先生の御尽力の賜物であることを一会員として感謝する次第です。

最近は必要な技術情報はインターネットから各種の技術データーベースから見ることが出来ますが、佐藤敏彦先生が日頃、推奨されているように**本研究会誌**は会員、非会員**を問わずに、「近畿大學学術情報リポジトリ」**で閲覧可能です。自分もこの貴重な情報のお世話になる機会が増加してきました。

最近、この情報から**近畿アル研誌 38 (1973) p.1 ～ p.7 に記載された金属材料技術研究所**福島敏郎先生の**「アルミニウム表面処理の将来の展望」**を拝読させて頂き、感動しました。

当時の対象として論じられた懸案事項や問題点は現在、大部分解決しましたが、問題点の捉え方は 42 年前の論文とは言えども、現在のアルミニウム表面処理の問題解決に重要な指針を与え、大いに参考になります。　項目のみ、概略を記すと、１．未来予測の問題：統計量に基づくデーター解析による数量の予測は容易であるが、質的内容、特に材料関係の技術予測は難しい。データー解析による予測の手法は田口常弥著【予測の科学】(ﾀﾞｲﾔﾓﾝﾄﾞ社) を紹介している。２．今後の生産社会：では 2 点から論じており、1 つ目は表面処理の付加価値生産性を評価して企業を進展させる。2 つ目は中小企業と大企業を比較すると給料や従業員 1 人当りの付加価値額は大企業が圧倒的に多いが、従業員総数は大企業の 2 倍以上であり、構成人員から見る中小企業優先論が重要とされている。又　働き甲斐の比較では中小企業側の評価が大きい。これには 6 つの理由が挙げられているが企業経営や精神的労働環境の改善に有益としている。　３．表面処理の方向：では、（１）複合材料の開発（周辺技術に着目し、アルミの表面処理の優位性を活用する)、（２）新製品の設計（注文者、発注者だけでなく、技術者、デザイナー、設計者と共同でベンチャービジネスを狙う）の２点を方向付けしている。　４．表面処理技術の進歩：　表面処理の量産に係わる計測制御及び装置技術はもちろん､研究集約的な表面処理の固有技術の必要性を挙げている。

このような新技術テーマは技術者が常に頭に入れておくべきで、新しい研究テーマを１人、30 件以上持つことが肝要としている。発想→基礎研究→応用研究→工業化研究→企業化→流通の段階で達成される。発想の中には A. 科学技術的研究テーマ､B. 生産技術研究 (ニーズの有るもの、基礎研究段階にあるもの、応用研究段階にあるもの、既に工業化研究段階ないしは生産実施段階にあるもの、C. 需要開発段階にある技術･製品、D. 環境技術が含まれる。5. アルミ成型加工法

の進歩と表面処理ではアルミ製品の用途を増やすために先ず木製品に注目することと言われている。　以上、福島先生の「アルミニウムの表面処理の将来と展望」を引用させて頂きました。これらを参考に技術の確立、業界の安定に努めていくことを年初に当り念じる次第です。

以上